

校内調査を活かした地理授業

小橋 拓 司*

I. はじめに

現代世界の地理的認識を深める一環として、身近な地域の学習がいかにかつ大切かについては、これまでさまざまな指摘がなされてきた。例えば戸井田 (1997) は、「身近な地域」は生徒にとって格好の実物教材であり、フィールドワークを通して地理的な見方や知識、地理学習に対する関心動機付け、社会参加への意欲などが養われることを指摘した¹⁾。桜井 (1999) は、地域教材の開発ないし地域学習は、地理教育のみならず社会科教育全体においても必要不可欠なものである点を指摘している²⁾。

一方高等学校の新学習指導要領をみると、例えば地理 B の (2) 現代世界の地誌的考察、ア 市町村規模の地域の項において、「直接的に調査できる地域の特色を多面的・多角的に調査して」とあり、直接経験地域の調査を通して地理的に捉える視点や方法をより確かに身につけさせるよう述べている。

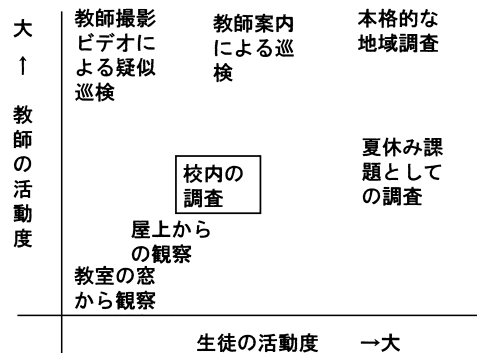
しかしながら、地域調査をおこなっている学校数はそれほど多くない。その理由を考えると①授業時数の不足、②50分単位という授業の制約、③多人数の生徒への指導が困難、④交通事情の悪化、⑤教師の力量・熱意不足、⑥地理を専門とする教員の不足などがあげら

れよう。

本稿においては、上記の問題点を少しでも補う手段として、校内のさまざまな事象を調査した事例を取り上げ報告する。

II. 校内をフィールドにする

これまでおこなってきた実践を参考として、身近な地域素材を授業で活用する事例をまとめてみた (第1図)。教師の活動度と生徒の活動度を軸として事例を概略的に配置した。教室の窓から見える地形を生徒に説明したり、窓を開けて海風を感じさせるような事例は、生徒も教師も活動度が低く手軽なので左下にくるが、教科書に数頁にわたって掲載されているような本格的な地域調査は、生徒も教師も活動度が高いので右上にくるであろう。そして一般的に生徒も教師も活動度が高



第1図 身近な地域素材を授業で活用する事例

* 兵庫県立東播磨高等学校

ければ高いほど実施に困難をともない、実施回数も減少すると考えられる。

ところで地域教材開発には 2 つの目的があるといわれている。1 つは地域社会を学ぶことそれ自身が目的であるとする立場と、もう 1 つは地域学習を方法概念から捉える立場である。高等学校においては後者の地域内の諸事象を関連づけて捉えるための場 (桜井 1999)³⁾ であるとする考えが主流であろう。そのように考えると、地域に出なくても校内の事象を利用することによって、地理的な見方・考え方を養うことも可能ではないだろうか。

第 1 図に示したように、学校内を素材とした事例は、教室の窓や屋上から観察する事例と地域に出て調査をする場合の中間に位置すると考えられ、地域に出て調査をするゆとりはないが、何かフィールドワークを体験させてみたい場合には最適ではないかと考えられる。

学校内を素材する利点として、①校外へ出る場合と異なり、管理職への届けが不要。②交通安全への配慮が必要ない。③校外の目的地に到着するまでの時間が節約できる。④校内なので他の教師もおり、目が行き届き、生徒を把握しやすい。⑤校区内よりもさらに身近で共通の素材を用いるので、生徒への理解がはかりやすい。⑥自分の学校を知ることにつながり、自校愛の育成につながる。といった点が考えられる。

また新学習指導要領との関連では、地理 B の解説において「調査の方法や内容によっては、例えば学校周辺の狭い地域を設定するなど弾力的に考えることも必要」、「直接経験地域の特色を生かして、この規模なら調査活動ができるよう適切に地域の範囲を設定」⁴⁾ と

あるので、学区規模の地域調査が困難である場合は、校内における調査は十分実施可能であると思われる。

地理授業における校内調査について、白石 (2001) は勤務する工業高校において、コンクリートの鍾乳石、記念碑、崖崩れ現場をまわる実践例を紹介している⁵⁾。岩田 (2001) は、勤務する農業高校の農場の地形や気候、土壌を考察する実践をおこなっている⁶⁾。また神戸市立六甲アイランド高校では、校内を歩測による実測図の作成をおこなっている⁷⁾。小橋 (2000) は、校内における現象を収集し活用することの重要性を指摘した⁸⁾。しかしながら小学校では、生活科の校内探検にはじまり、さまざまな取り組みがあるのに比べ、高等学校においては実践例は多くないように思われる。

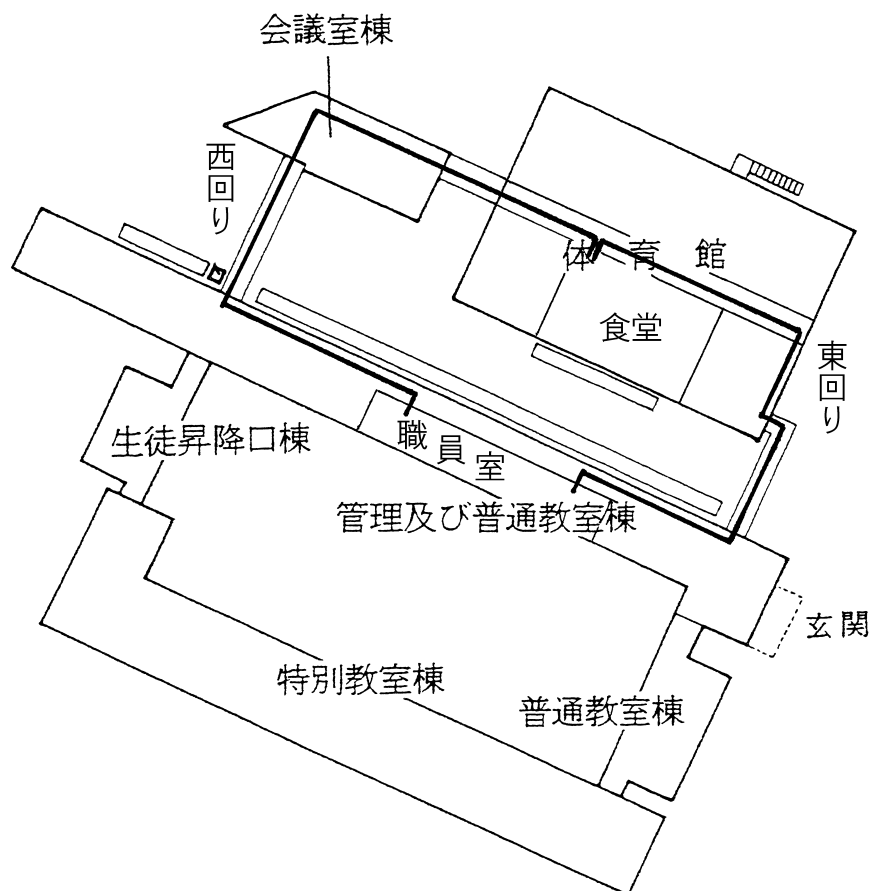
Ⅲ. 学校内をフィールドとした事例

学校内の事象を素材とした 2 つの事例を報告する。事例 1 は実際に校内を歩測するもので、事例 2 は校内に捨てられたチューインガムのカスを素材として取り上げるものである。

(1) 事例 1 校内歩測調査

a) 課題の設定

本校⁹⁾では職員室は管理および普通教室棟 1 階に、食堂は体育館の 1 階に位置している。本校職員が食堂へ向かうのを観察すると、玄関手前を経由するルート (以下東回りと呼ぶ) と会議室棟を経由するルート (以下西回り) の 2 つがある (第 2 図)。そして職員室西出口付近の職員は西回りで食堂に向かい、東出口付近の職員は東回りを利用しているように思



第2図 校内図

われた。

そこで、「職員室から食堂への道」をテーマとして、①歩測によって1歩の長さを知る。②職員の東回り、西回りのどちらを選ぶかは、何に影響されるのか考える。③身近なところにも地理的な問題が潜んでいることを知ることがを目的として、教材化をおこなった。

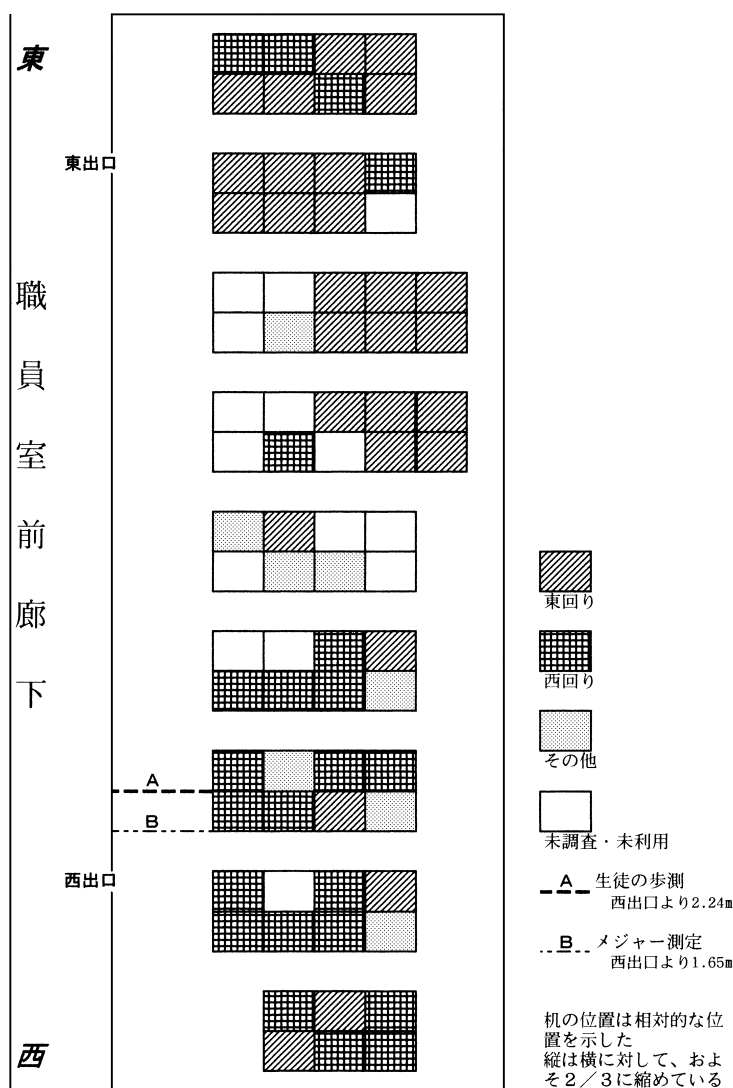
b) 調査の結果

まずこれからの授業の内容を説明し、直ちに食堂前に移動。①メジャーで40mのラインを引き、そこを順次に歩かせる。2回計測した後、②食堂入り口から職員室の東入り口、東入り口から西入り口、西入り口から食堂入

り口までを歩測する。③以上が終了すると教室に戻り1歩の長さを求め、さらに各地点間の距離を計算し、結果を提出させた。

40名の生徒の結果を平均すると1周(①②③の合計)は、204.36mとなり、西回りと東回りの中間点は職員室西出口より2.24mの地点となった(第3図線A)。後日ウォーキングメーターで測定すると1周は214.1m、中間点は西出口より1.65mの地点であった(第3図線B)。

次に、職員室から職員がどちらのコースを通過して食堂に向かうかを見ると(2001年10月調査)、予想通り東出口付近の職員は東回

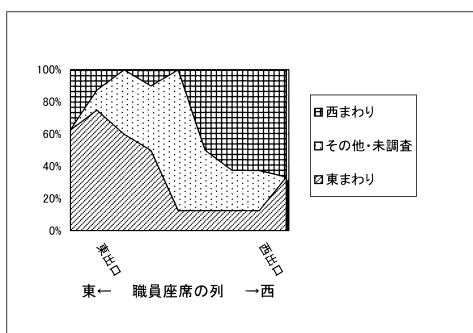


第3図 職員室内の配置と食堂へのコース選択

り、西口付近の職員は西回りのコースを通ることが多いことは一目瞭然である。中央部が空白で未調査・未利用となっているのは、時間講師席が集まっている区域のためである。この結果を各「シマ」単位¹⁰⁾で折れ線グラフにしてみると、職員室中央部付近が東回りと西回りの境界となっているように思われる(第4図)。これを実際の歩測調査から導き出

した中間点と比べてみると、6～7 m 程度のズレが生じている。つまり空間的な中間点に対して、やや東側の職員でも西回りをとる人が多いことがわかった。また若干ではあるが、職員室の端にいる職員でも、予想とは逆のコースを選ぶ例もみられる。

さて、職員が必ずしも最短距離を通らないのかという点について、職員へのインタ



第4図 職員の食堂へのコース選択比率

ビュー結果をまとめると「なんとなく」とか「気分次第」という回答が多く、どちらが近いかというようなことは、普段は余り意識されていないことがわかる。また少数ではあるが「同僚を誘っていくため、回り道をする」、「トイレによる」、「生徒がいない方を選ぶ」、「行き帰りのコースが異なる」という回答もみられた。またインタビューの感触では、滅多に利用しない職員ほど、遠回りであっても意に介さない傾向があるように思われる。

実際の授業では、時間は歩測による調査に1時間、結果を考察しまとめるのに1時間を当てた。考察にあたっては、職員へのインタビューは、課題を設定する前の段階で先に教師がおこなったが、次回おこなう際には生徒にインタビューさせることもできよう。また本校では職員室の上階にホームルーム教室があるため、2階や3階においても同様の境界線があるはずである。生徒自身のコース選択を調べさせることも考えられる。

歩測調査においては、やる気のある生徒にとない生徒の差が大きかった。特に面白そうに取り組んでいたのは理系志望の生徒であったように思われる。

今回の調査結果を、村落・都市分野の商圈

の授業において「魅力度が同じ場合は最も近い商店が利用される」が「距離以外の要因も大きくかかわっている」ことを考えさせる材料とすることも可能であろう。

なお、2001年度は時間的都合からロングホームルームの時間を利用したことをお断りしておきたい。2002年度については地図学習の単元において、さらに一歩進め、歩測によって校舎地図の作製をおこなった。

(2) 事例2 校内チューインガム調査

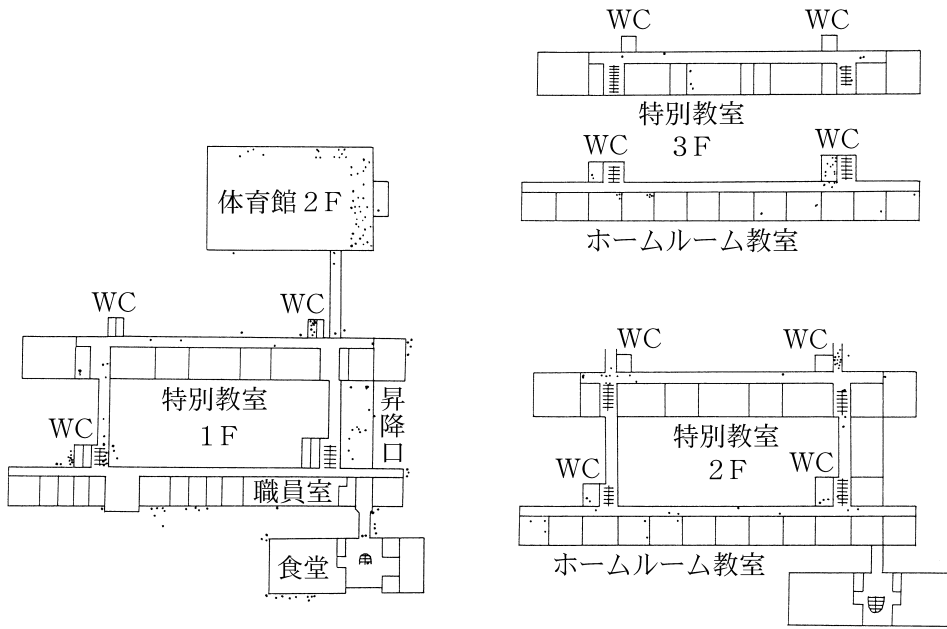
a) 課題の設定

調査対象とした高校（以下 A 高校¹¹⁾では、残念なことにチューインガムのカスが校内の床にこびりついていた。生徒が吐き捨てたものが残っているようである。そこで校舎内とその周辺のガムを一つ一つ剥がしてまわりながら、発見したものを記録してみた。そしてその分布図を作成することから、生徒の行動や空間認識を考察できないかと考えた。

調査にあたっては、床に張り付いた文化祭で使用したガムテープの汚れと間違わないようにするため、ヘラで剥がした後、匂いで確認したり弾力を確かめた。また清掃監督の教員の指導の差によって、ガムカスが残っているところと清掃されてしまっているところとの差ができる可能性もある。この点について A 高校は伝統校であり、調査結果を指摘をするまで、美化係の教員はその存在を把握していなかったため、教員の指導の差は小さいと考えている。コンクリートやタイルなど床の材質によってガムカスの残存率が異なる点にも留意する必要がある。

b) 調査の結果

1992年5月に校内とその周辺を調査した結果、約230個のガムカスを記録し、分布図を



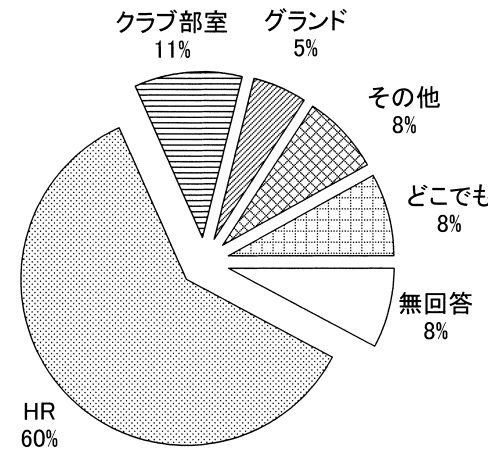
第 5 図 ガムカスの分布図

第 1 表 ガムカスの分布が多いところ

| | |
|---------------------|-------|
| 体育館 2 階ギャラリー | 50 以上 |
| 普通教室棟 3 階男子トイレとその周辺 | 15 |
| 普通科教室棟回り (南側) | 14 |
| 体育館との渡り廊下 | 14 |
| 食堂周辺テラス | 12 |
| 昇降口 | 12 |
| 特別教室棟 2 階男子トイレとその周辺 | 11 |
| 特別教室棟 1 階男子トイレ | 11 |
| 普通教室棟西男子トイレ | 10 |
| 体育館階段 | 8 |

作成することができた (第 5 図)。

その結果、ガムカスがこびりついている主な区域は第 1 表の通りである。まず分かることは、体育館の 2 階に極端に多いことである。調査では 50 個を数えたところで中止した。おそらくここに置かれたトレーニング器械を利用するため、生徒の出入りがあるためであろう。また練習試合や大会にきた他校生



第 6 図 アンケートからみたガムを噛むところ

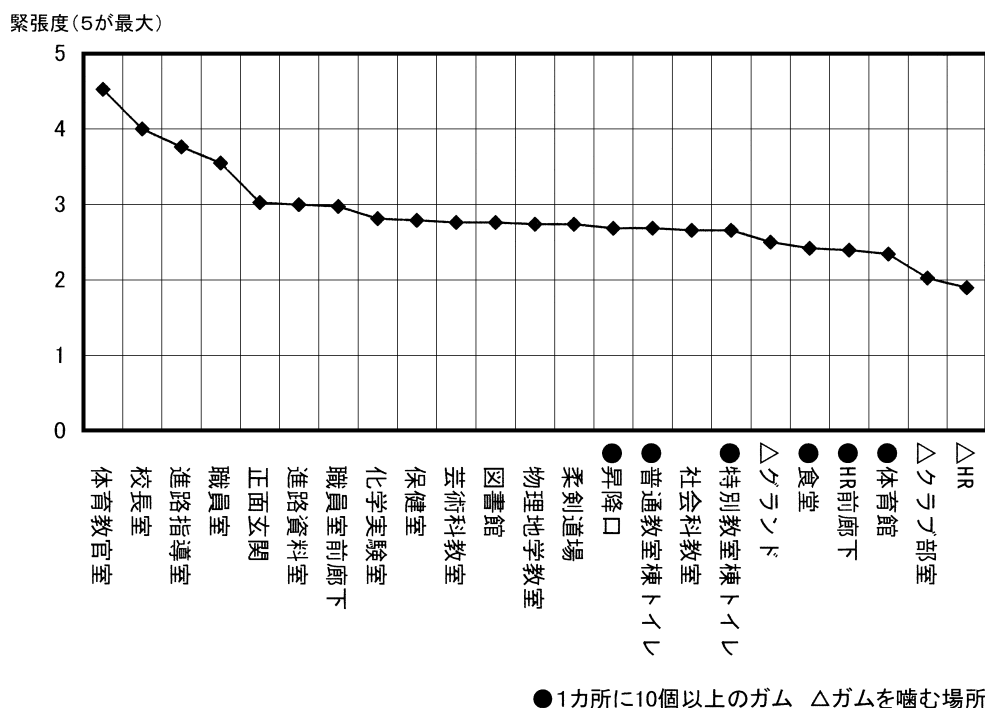
徒が捨てたものも含まれている。次に男子トイレとその周辺が、ガムカス分布上位 10 カ所のうち、4 カ所も含まれている点は注目に値する。また体育館との渡り廊下、昇降口な

ど建物の出入り口も多そうである。表中にはあらわれてこないが、ホームルーム教室では2カ所ある出入り口のうち、後ろの出入り口付近に多い傾向が見られる。

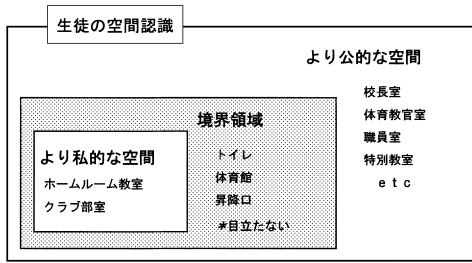
さて生徒はどのような状況において、チューインガムを吐き捨てるのであろうか。どこでもかまわず吐き捨てるのであれば、その分布はランダムになるはずである。ランダムではないということは、無意識に何らかの意図がはたいていると思われる。「ここはガムを噛んではずいところ」、「ここは噛んでもかまわないところ」という空間に対する意識の差があるように思われる。この仮説にしたがって、生徒へのアンケートによる意識調査を試みた(1997.1月実施)。ガムを噛むことは校則違反なので、なかなかインタビューが難しかったが、卒業間近の理系生徒に「もし噛

むとしたら」という仮定形の設問で何とか引き出すことができた。

その結果、ガムを噛むのはホームルーム教室が圧倒的に多く、次いでクラブの部室、グラウンドの順になっている(第6図)。また学校内の主な場所について、緊張するかリラックスできるかを5段階できいてみた。この緊張度の平均を大きいものから順に並べてみたのが第7図である。この図を見ると、体育教官室をはじめとする教員の居場所が緊張度が高く、ホームルーム教室やクラブの部室ではリラックスできていることがわかる。さらにこの図に第1表や第6図で示した、ガムカスの多かった区域とガムを噛むと生徒が回答した区域を記号で入れてみた。するとガムを噛むのはやはり右側のリラックスできる区域が多く、ガムカスが多いのはそのすぐ左側にきて



第7図 生徒の緊張度(平均)



第 8 図 チューインガムの分布からみた生徒の空間認識

いるように読みとれる。換言すれば、校内に身なりをきちんとしなくてはならない緊張する空間と、少々リラックスしてもいい空間とがあり、その2つを生徒は行き来しているようだ。そして、生徒はリラックスできる空間から緊張しなくてはならない空間へ移動するときにはガムを吐き捨てているものと考えられる。つまり吐き捨てられたガムは、生徒がつくった校内における社会空間の境界を示す「しるし」ともいえる（第8図）。

なおこの事例は、結論を得るのに試行錯誤をくり返したため、ガムを剥がすのを見ていた学年と、アンケート調査に答えた学年とでは5年半ほどの開きがある。したがって実際には、この事例を体験的に通しておこなった学年はなかったが、環境問題の単元において、環境倫理を高めるための事例として展開した。

IV. まとめ

社会参加へつながるフィールドワークの技法はますます重要になってきており、総合学習においても「地域素材を活かす」ことが求められている。

戸井田（1997）は、フィールドワークの力

を育てる指導計画の中で、段階を4つに分け、教師が主体となって学校周辺の巡検指導をおこなう第1段階から、生徒と教師（生徒主体）が項目の選定や地域調査をおこなう第4段階までであることを指摘している¹²⁾。この4段階を地理担当教員ができれば何の問題もないわけであるが、全ての教員がそうできるとは限らない。特に実施時間の少なさは致命的であろう。受験指導中心でなかなか最初の一步が踏み出せない教員も多いのではないだろうか。

しかしフィールドワークの指導力は、実施しなければなかなか身に付くものではない。何はともあれ、とりあえずちょっとやってみることが大事ではないかと考える。そうした点で、校外に出ることが全てではなく、学校内の手軽な素材から始めてみるのも一つの方法ではないかと思われる。

〔付記〕本稿は、2001年立命館地理学会で、2002年兵庫地理学協会で口頭発表した内容をまとめたものである。

注

- 1) 戸井田克己「フィールド・ワーク指導のコツと急所」、(寺本 潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己『地理の教え方』、古今書院、1997、所収)、113～124頁。
- 2) 桜井明久『地理教育学入門』、古今書院、1999、190頁。
- 3) 前掲2) 189頁。
- 4) 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』、実教出版、1999、216頁。
- 5) 白石健一郎「校内を歩こう」、地理・地図資料 2001.8、2001、8～9頁。
- 6) 岩田礼子「農業高校で学ぶ地理」、地理・地図資料、2001.10、2001、8～9頁。
- 7) 前田和宏「公開授業に参加される他校の先生方のために」、神戸市立六甲アイランド高校地歴公民科公開授業資料、2001。
- 8) 小橋拓司「校内フィールドワークの勧め」、高

校教育展望6月号、2000、30～33頁。

- 9) 対象とした県立東播磨高等学校は、進学を希望する生徒の多い普通科高校である。生徒数1080人。
- 10) 職員室において、向かい合った2列の机の集合体を、通称「シマ」と呼んでいる。
- 11) 生徒数1000人弱。兵庫県東播磨地方の北播磨学区内の伝統校であるが、事例の内容から考えて校名を公表するのは控えたい。
- 12) 前掲1)